

—目 次—

- 1 大捕物への罰 002
- 2 早朝の警ら任務 017
- 3 思わぬ再会 046
- 4 初めての告白 059
- 5 エピローグ 079

※この作品はフィクションです。

実在の人物や団体などとは関係ありません。

「おい！ 待てと言っている！」

日下部 凜くさかべ りんは駅のホームで声を張り上げた。

朝の通勤ラッシュで電車に乗り込もうとする人々を一瞬、ためらわせるほど鋭い呼びかけだった。

迫力あふれる声に人々の視線が集まるが、気にかけている余裕はない。

通勤ラッシュで混雑するホームをすいすいと『目標』は進んでいるのだ。

——痴漢。

年齢は恐らく四十代。サラリーマン風の男。小太りな体型のわりに、足は速い。若い頃ラグビーでもやっていたのかもしれない。

人混みをもものともせず進む姿は、タツクルにめげずに進むラガーマンに近い。

ここで逃げられたら、必死に勇気を振り絞った女子高生に申し訳ない。

泣き顔を見せたくないのか、うつむいて顔は見られなかったが、その声は恐怖と不安で絶え間なく震えていた。あれは演技ではない。十年近く警察官をやっていたら勘で分かる。声だけでも感情は伝わるものだ。

信じてもらえなかったでしょう。

もし冤罪えんざいだったら、どうしよう。

でも痴漢に遭った時の恐怖やあの時間——短くとも延々と終わらない拷問みたいな時間を、これからずっと抱えて生きていくのはもつと嫌だ。

そう——彼女の声は語っていた。はっきりと。

彼女は今、女性駅員に様子を見てもらっている。

まさに今日ひとかけらの勇気を振り絞った勇者だ。

泣き寝入りする事例ばかり見てきたから、今回の『目標』は絶対に逃せない。  
凜は駅構内の地図を頭に思い描いた。

(この先は地下にくだるエスカレーターか……)

人々が列車に乗り込み、出発の合図がホームに響く。ゆつくりと先頭車両が動き出し始める。

ここは都内で最も乗り入れ路線が多い急行停車駅だ。

電車に乗り込む客も多ければ、降りる客も多い。

駅を出れば高層ビル群が建ち並ぶ。

時刻は午前八時半。

地上に出られたら、こちらに勝ち目はない。

そもそも被疑者を逃がすハメになったのも今日の相棒、仲田なかたのせいだ。

何が気にくわないのか、なけなしの勇気をふりしぼった女子高生に向かって、

「それ本当にあったの？ 君の気のせいじゃなく？」  
などと口にした。

女子高生についていた女性駅員が猛然と抗議し、凜も仲田に対し苦言を申し立てようとした隙を狙って、奴が逃げた。

（とんだ失態だ！ あのクソ野郎）

上司には仲田の失言も含めて報告しなければ――。

だが今は『目標』の確保が先決だ。

男がエスカレーターに乗り、猛然と駆けおりにいく。

目の前にはエスカレーターが三つ設置されていた。昇りが二つ、降りくだは一つ。

エスカレーターのあいだはそれぞれ広く間隔かんかくがとられ、まるで銀色の滑り台だ。

その滑り台は本来なら絶対に乗ってはならない場所だ。けれど迷っている時間はなかった。

ひらりと跳躍し、ちようやく銀色の滑り台に乗り込む。

驚くべきスピードで身体が滑降した。

摩擦まさつでちりちりとスーツが熱い。

決して素肌に触れないよう細心の注意を払いながら、降りていく。

『目標』の位置を目で確認する。

ちょうどエスカレーターを降り終える瞬間だった。

もう追ってこないだろうと慢心の笑みをたたえている。

その顔が猛然と滑降してくるこちらの姿をとらえて、凍り付くのが見えた。

肘を使ってブレーキをかけるように減速し『目標』の男に飛びついた。地面にぶ

つかるもすぐにエスカレーターを降りる客の邪魔にならぬよう、距離をとる。

「くそっ！ 離せよ！」

まだ逃げようとする男の背中に全体重をかけて膝を乗せる。両手を後ろで縛ると

ようやく静かになった。

「詳しいお話をお聞きしたいので、署までご同行願います」

男の太い猪首いぐびをしつかりと押さえ、抵抗の意思がなくなるのを確認してから立たせた。すると周囲から割れんばかりの拍手が響いた。

通勤に向かう彼らにとつて、この逮捕劇は一種のショーに見えたらしい。

「……どうもお騒がせ致しました」

照れ隠しに一礼して、駅のホームへと足早に戻る。

道すがら人々から温かい声援や視線を送られたが、それを受け取るべき人物はあの女子高生だ。

自分にはもつたいないことだ。

そんな気持ちが悪かった。



「誰が駅の構内で大捕物おとりものをしろと言った……！ 乗降客に怪我けがでもさせたらどうするつもりだ！」

鉄道警察隊を取り仕切る隊長の声が狭いオフィスに響きわたった。背後の同僚たちはまたか……とさめた反応だ。

それもそのはず凜が鉄道警察に配属されてから、こうした出来事できごとはもはや恒例行事となりつつある。確か今年は五回目だったか。彼らの反応がさめるのも無理はない。

定年間近の隊長はこれみよがしにデスクに置かれた報告書を指で叩いた。

「それと別々に報告書を出すな。私が必要としている報告書は一通だ。二通ではない。」

じろりと睨まれたが、仲田の報告書に合わせれば駅員が提出してくるであろう報告書と整合性がとれない。

あくまで駅員は鉄道会社に所属している。

そこと波風立てることがあれば、今後合同で捜査に当たることにも難しくなる。

「しかし……隊長」

「日下部。まだある。黙れ」

階級では隊長が上だ。

上司に黙れと命じられれば黙るのが警察社会だ。

くすりと隣に立つ仲田がこれみよがしに笑う音が聞こえた。

（この場でぶん殴ってやろうか）

今思い返してみても、今回の大捕物が発生した原因の多くは仲田が被害女性に配慮のない言葉を発したのが原因だ。

そのせいで被疑者が逃げ、大捕物をするはめになったのだ。

(俺とて好きでやったわけじゃない……)

後ろで手を組んだ状態で、居住まいを正す。

ふと、スーツの胸元が少しすり切れているのに気がついたた。

エスカレーターをすべり落ちる際、肘でブレーキをかけたから袖口はもつとひどいのかも知れない。

(テイラーのオヤジさんにまた怒られるな)

このスーツは鉄道警察隊に入ることが決まった日、父が馴染みのテイラーに頼んで仕立ててくれたものだ。

二十九の若造にはもったいないほど上等なスリーピース。

夜空を思わせる濃紺の生地に、ジャケットの襟は仕事で動きやすいよう細めに、丈はちょうど尻が隠れるくらい長さに。

中に着込んだベストの背中には小さな装飾品がついている。バックベルトだ。

——男にも色気つてのは必要だからな。

それがテイラーのオヤジさんの口癖だった。

スーツの心配をしていると、隊長がため息をついた。

「まったくお前ら、もう少し仲良くできんのか？」

それはもう無理だ。

仲田と組んで五年、それでも我慢をしてきた方だ。

唇をすぼめて互いに不満げな顔を浮かべると、隊長が今日一番でかいたため息をついた。

「こういう時だけ波長が合うってんだから……まったく」

どうやら仲田も自分と同じ気持ちだったらしい。

そのツラをいちいち拌む気にはなれなかったが。

「とにかくもう一度書類は作り直せ」

しっしっしと隊長のデスクから追い払われる。

するとちょうどいいタイミングで昼休憩の合図であるベルが鳴った。

同僚たちが我先にオフィスから出て行く。仲田もそれに続いて出て行く。

一気にオフィスは人の気配が途絶え、残されたのは隊長と凜の二人きりとなった。それだけではりつめていた空気がゆるむ。

「……それで？ どうせまた報告書二枚出してくるんだろ。お前ら。俺はどっちを採用したらいいんだ？ 凜」

「……駅員の報告書とつりあいが取れてるものを採用してください。それと名前で呼ぶのはやめてください。ガキじゃあるまいし」

「つれないなあ。俺が昔、遊びに行ったら、おじさんのお膝大好きって膝枕せがんできたくせに」

「っ、何年前の話ですか！」

じろりと睨みつけたが、この男は父の相棒だった人だ。

効果などささない。

「あんな大捕物した罰として、今週ずっと『凜ちゃん』と呼んでやってもいいんだぞ？」

「あらぬ噂が立つので絶対にやめてください」

定年間近でしょう、と嫌味ついでに言えば隊長の顔がまじめに戻った。

「定年間近だから言ってるんだよ。あいつが癌がんで亡くなってからお前のことは息子同然に思ってる。だがこの業界、定年したらそこでおさらばだ。もう何もしてやれることはない」

ゆっくりと噛んで含ませる口調は、やはり父に似ている。長年相棒だったせいなのか。隊長が神妙な顔で尋ねてきた。

「俺がやめたあとでも仲田とうまくやっていけそうか？」

「……折り合いはつきます。あいつだって被害者の女の子にあんなキツく当たったのは、今の奥さんと離婚調停中だからでしょ。そのくらい分かっています」

「それを本人に言えたらお前も一人前と認めてやれるんだがなあ」

隊長のブラックコーヒーを啜る音が、がらんとしたオフィスに響く。

「そんな配慮を年下の俺にされていると感じたら、あいつにますます嫌われますよ」  
仲田の男としてのプライドをずたずたにするようなものだ。

そんなことになれば今のような犬猿の仲では済まなくなる。

「まあ、それもそうか」

コーヒーを飲み干すと、隊長はデスクから立ち上がり、大きく伸びをしてから出口へ向かった。

ついていこうとすると、出口でくると振り返ってこう言った。

「あ、そうそう言い忘れてた。お前、明日から早朝警ら任務に当たれ」

「え」

思わぬ発言に、自分の顔が今日始めて引きつっていくのが分かる。

父同然に慕っていた男はやはり甘くはなかった。

「あれだけの大捕物して迷惑かけたんだ。罰はちゃんとつけてやらんな。気張きばれよ〜」

ひらひらと手を振って部屋を出て行った。

早朝の警ら任務。

痴漢やスリを捕まえるために私服で警戒に当たる任務だが、問題はそこではない。

——早朝。

つまり通勤ラッシュの満員電車に乗りみ警戒に当たれということだ。その凄まじさと来たら半端ではない。

あの分だと任される路線は都心直結だろう。

警官としてそれなりに体力に自信はあるつもりだ。しかしすし詰めすしづめの車内に押し込められて耐え抜くのは体力よりも気力の方が重要だ。

「……最悪だ」

今日この時ほど、自分の行いを悔やんだ瞬間はなかった。

(狭い……！)

早朝。

ラッシュアワーの電車に乗り込み、都心に着くまで警らに当たる。

乗り込む時間は一時間。

立つ場所は三十分ごとに変え、それらしい輩に注意を払う。今年の警ら任務は夜のシフトばかりで早朝は久しぶりだ。

夜も夜で酔っぱらいのいなし方からスリや置き引きのチェックまでと多彩だったが、朝の方が格段に疲れることは間違いなかった。

(不審者は目視<sup>もくし</sup>でチェック、と……)

車両の中ほどに立ち、つり革を掴んでそれとなく周囲に視線を配る。

それらしい者は見かけない。皆、早朝で眠たげな目のままあくびを噛み殺している。

唯一、気になった点は女性客が見当たらない事だった。

普段ならこの車両には電車通学している女子高生がちらほらいるのだが、今日は一人も見当たらない。

部活の朝練が無い日なのか。

乗り合わせている客の多くが壮年のサラリーマンだった。

例外は凜の斜め前に立つ青年だった。

大学生くらいか。

人懐こそうな童顔が、年上の女性に受けそうだ。

ベビーフェイスというやつか。

背丈は凜と同じくらい。スポーツをやっているのか、細身だがなかなか良い体格

をしていた。

(陸上とかやってそうだな)

壮年のサラリーマンが多い車内で、自分と近い年齢になんとか親近感を持ってしまおう。

ついつい目が大学生に引き寄せられる。

すると彼と目が合った。ニコリと微笑まれる。

「っ！」

すぐに視線をそらすが、盗み見ていたことはバレバレだった。

(何をやっているんだ俺は……)

車窓を流れる風景に集中しようとする、何か股の間に入り込んできた。

驚いて覗き込むと後ろに立つ男性のカバンをちょうど両足で挟んでしまったらしい。

そつと足を開いてずらそうとするが、この混雑だ。なかなか外れない。

むしろ太ももの間を下から突き上げてくる。

「ッ」

こうなったら手でどかすしかない。

あいている手で背後から股間に入り込んだカバンを抜こうとすれば、尻に柔らかいものを当てられた。

（——今日は一体なんだ……？）

これだけ混んでいたらわざわざ他人と密着しようと思わないだろう。

なのに次から次へと接触してくる。

深いため息を一つついて、体をずらそうとすると、尻をゆっくりと掴まれた。

男の太い指が五本全部使って、凜の引き締まった尻肉を持ち上げてくる。

（は？ どうして俺が……まさか女と間違えてるのか？）

文句を言わなくては。

振り返ろうとした瞬間、別の手がぬっと伸びて凜の股間を手のひらでおおった。

「……………え……………」

正体不明の手は凜の股間をゆっくり焦らすようになって回すと、次第に無遠慮な手つきになった。

「やめ——」

声を上げようとすれば、スラックスのジッパーをゆっくりと下げられていく。

男の太い指がそのままスラックスの内側に侵入し、下着に隠れた性器をじかにさわろうとしてくる。

失礼極まりない手を排除しようとする、両手を掴まれた。

「っ、おい……………」

さすがに声を荒らげて左右に立つ男たちを見ると、彼らはニヤニヤと下品な笑みを浮かべていた。

（まさかコイツら、俺を狙って——！）

背後から、ふうつと生あたたかい息を耳に吹きかけられる。

「俺らの仲間を散々捕まえてくれた日下部警部補のおちんちんはどんな形かなあ？」

股間をいじる指が下着の中にまで入り込んでくる。萎えた性器の竿を持ち上げて、下着の穴から取り出そうとする。

「おい、よせっ。よさないか……！」

小声で注意するが竿を握りこんだ指は止まらず、そのままゆっくりとストラックスのすき間から性器をはみ出させた。

にゆるん♡

股間から性器が躍り出ると同時に周囲の男たちが、小さな歓声を上げた。

「ちっちえなく。俺の息子の包茎ちんちんよりちっさいじゃん」

「エリート警部補のおちんちんはお子ちゃまサイズか。カワイイねえ」

「しごいたら、お子ちゃまちんちんもおつきくなれるかな？」

周囲に立つ男全員が自分を見ていた。その目は爛々らんらんと輝いている。

まるで獲物を前に舌なめずりする肉食の獣だ。

凜は数瞬、ありえない事態に呆然となったが、すぐに己を取り戻した。

こういう連中を捕まえるために、警察官になったのだ。

卑怯で卑劣で、一人では何もできない輩。

徒党を組まねば、勇気も振り絞れない情けない男ども。

(十二年前を思い出せ……)

まだ高校生だった頃、通学に使っていた電車で女に間違われた。

こちらの尻を思う存分揉みしだいて、しまいにはそのチンケな肉棒を握らせようとしてきた輩。

今となってはもう顔もよく思い出せない。

けれどあの時は駅に着くと同時にソイツをホームに蹴り飛ばした。

恥も外聞も捨てて、自分が男という事も忘れて、この痴漢野郎と罵ののった。  
それだけで周囲の人々の目は男を処罰するかのよう<sup>のし</sup>に冷たく見下ろした。  
駅員が来るまで、凜が考えていた事といたら父がどんな相手と戦っているかという事だった。

今まで父が鉄道警察での仕事を語ったことは一度もなかった。

けれどあの日痴漢という卑劣な行いをする男を見て、やっと分かった。

こういう連中から駅を利用する人々を守っていたのだ。

だからあの日、鉄道警察官になろうと心に誓った。

大変な仕事だと分かっていたが、それでもあの日が自分の原点だ。

鉄道警察官として大切なスタートラインを切った。

今でもそう思っている。

だからこんな連中に負ける気は微塵みじんもない！

周囲を取り囲む男たちをキツく睨みつけた。視線だけで射殺せるほどの怒りを込めて。

「いいねえ。反抗的なほどこっちも燃える」

男たちがニヤニヤと笑う。

背後に立つ男にジャケットを脱がされる。

「お。スリーピースか。いいスーツ着てるねえ。このベストのバックベルト、キュツと引き締まったお尻引き立てててすごく可愛いよ。凜ちゃん」

「ッ！ 勝手に人の名前を呼ぶな……！」

すると男たちがゲラゲラと楽しそうに笑う。

「ええー。女の子を相手にしてるみたいでめっちゃくちゃそられるじゃん。ほーら、凜ちゃんの子どもちゃん、シュツシュしてあげるからね」

「やめないか！ ——ッ♡ っ♡」

ぬち、ぬちちっ♡

恥ずかしい音を立てながら性器をしごかれる。笠を親指の腹でなぞられる度、背筋がゾクゾクした。

金玉を手のひらで握りこまれ、竿の裏筋を別の指でなぞり上げられる。気持ちわるい。

そう心では思っているのに、身体はいとも簡単に男の手コキに反応してしまう。

「お、お、お。先っぽから透明なおつゆが出てきたよ。これは何かな？ 凜ちゃん」

「うるさい。だ——まれ……エ」

「あら〜。そういう素直じゃない子はお仕置きしないと」

細い小枝みたいなプラスチックの棒が、竿を扱っていた手に渡される。

シリコン製で柔らかいのか、ちよつと揺らすだけでびよんびよんとはね回る。

「普通は何もついてないシンプルな奴から始めるんだけど、反抗的な凜ちゃんにはこのイボイボがついてるタイプを使ってあげるからねえ」

「……なに、を……」

どこにそんな細い棒を入れるのか。

身体は理解しているのに脳が拒んでいた。

思わず腰が震えて、一步後ずさる。

「お？ 脅えてるの？ もしかしてこういう経験はあんまりないのかな。大丈夫。だいじょうぶ

気持ちよすぎてちよっと意識飛ぶだけだから」

男の言葉に追従ついでするかのように、他の男たちがクスクスと笑い合う。

「ほーら、凜ちゃんの子どもちんちん、食べてもらおうね。イボイボ尿道プラグ」

「やめっ——?!」

ぬ、ふ。ふ。ふ。ふ。ウ♡♡♡

イボを一つ、二つ、三つ。

強制的に細い尿道に啞えこまされる。太さにしてほんの数ミリだというのに、細い管がイボで広げられるたび、言い知れない刺激が背骨を駆け巡った。

ぷぢゅううう♡♡

透明な液体が亀頭から盛り上がり、ぽたぽたと竿に垂れていく。

萎えていた性器は完全に勃起し、今やシリコンの尿道プラグがもっと奥まで入るのを待ち望んでいる。

あともう一つ。

狭くて細い穴をイボで膨らませてほしい。敏感なココを容赦なくいじめてほしい。

そう言っていた。

「おーおー、おいしそうに啜えこんじゃってまあ。実は尿道責め、大好きなのかな？」

「そ、んなわけ……、……ある、かっ」

「頑固だねえ。そういう子には全部くわえてもらわないと」

言うなり半分くらいで止まっていたプラグを一気に全て押し込まれた。

ぢゅ♡ ぢゅ♡ ぢゅ♡ ギュウウウ♡♡♡

「〜♡♡♡ ツ♡ ア♡ っ♡♡♡」

一気に腰が蕩けるような快楽が広がり、立てなくなる。

あまりの気持ちよさに、恥ずかしさを忘れてしまう。涙を流してこらえようとするが、耐えられない。

そのまま奥まで押し込まれた。プラグを回転させられた。

一瞬で感じていた場所が切り替わる。右をなぶっていたかと思えば、手前に、真後ろに、あるいは左に。

細い尿道の中で四方八方いじめ抜かれ、太ももが小刻みに震える。

「——ア♡♡♡ やめ！ やめろ……オ！ ～っ♡」

ぶしっ♡♡

体内で何かが弾ける音がすると同時にイッた。

精液は一滴も出ていない。けれど下半身から下がトロトロに融けて、何も抵抗で  
きない。

何秒も断続的な射精が続き、背後に立つ男の股間に自ら尻をこすり付けていた。誰かの手に腰を支えてもらわないと、もう立ってられない。

「良いイキっぷりだったよ。凜ちゃんのイクとこしっかり撮ってあげたから、あとでオカズ動画にして送ってあげるね♡」

「な、にを……、……言って……」

あまりの快楽に目眩めまいがする。

目をこすって見回すと、スマホの黒いレンズが自分に向けられていた。しっかりと今の痴態が撮られていたことは間違いなかった。

「ア、やだ……。今すぐ消せえ……。エ」

スマホに手を伸ばすが、腰が蕩けた状態では掴むこともできなかった。

「安心しなよ。これからもっと楽しい事するんだから」

今までの男たちと違ってずいぶんと若い声が聞こえた。

二十代か。

声に張りがあって瑞々しい。

だからこそ男たちのなかでは目立った。

おそろおそろ振り返ると、そこにはあの人懐こい顔の青年が立っていた。

年齢が近いと勝手に親近感を覚えていたベビーフェイスの青年。

「電車が駅に着くまで遊ぼうね」

その言葉に彼も連中の仲間なのだと悟った。



ぬ、ぢゅ♡ ぬちちっ♡

いやらしい音が凜のすぐ後ろから聞こえてくる。

ストラックスは下着ごと床にずり落とされ、上はボタンを外されたベストにワイシ

ヤツという出で立ちだった。

凜のネクタイは両手を後ろで縛る拘束具に使われている。

列車は今も走っていた。

周囲を取り囲む男たちがちよつと体をずらせば、自分のあられもない格好が線路沿いを歩く人々に丸見えだった。

(こんなこと、ありえない……、……ッ)

いまや車内にいる男の大半は自分がかつて検挙した連中らしかった。

見知らぬ男たちの手に今も体のあちこちを触られ、尻には例の大学生のチンコを挟み込まされている。

太もものつけ根を熱い肉棒が通り抜けるたび、尻穴がキュツと身構えてしまう。

「まだ駅に着くまで時間あるから、声上げて大丈夫だからね。凜さん」

彼だけが礼儀正しい言葉遣いで自分を呼ぶ。

だがやっていることは他の男たちと同じだ。

人を言葉と指で嬲<sup>なぶ</sup>り、さらには心まで辱めようとしてくる。

「ふふ。僕がちんぽさしこむたび、凜さんのお尻ツンと上向くんだね。可愛い」

「……可愛く、なんか……ない……、」

「あれ？ 素直じゃない子にはまたお仕置きかな？ 尿道プラグずぼずぼしてもらおう？」

今も自分の性器に挿入されたままのプラグがびよんと揺れる。

「ッ♡♡」

ちよつと下半身を揺らされると簡単にあの快楽が舞い戻ってくる。

「やつ、腰揺らすなッ♡ また、感じ、ちゃ……う♡ ……、……♡♡♡♡」

「ひっ♡♡ だって。可愛い声上げるんだね。もつとおじさん達にも聞いてもらおうよ。凜さんのえっちな声、全部撮ってもらおう？」

するとスマホが徐々にプラグがねじ込まれたままの性器に近づいた。黒いレンズ

が竿にくつつきそうなほど近い。

「凄いぜこれ。凜ちゃんの子どもちんちんのシワとか全部丸見えだわ」

「お。じゃあ、おじさんも撮らせてもらお」

次々とスマホが現れて自分の性器を撮り始める。

シャッター音がそこから中から響き、プラグをねじ込まれたおちんちんがレンズに収められていく。

(いやだああアア……………ツ♡♡)

そこへ見知らぬ手がプラグの持ち手に伸びた。しっかりと握ると持ち手を反転させた。

ぐりんっ♡♡

イボイボが細い尿道をまたいじめ抜く。互い違いに盛り上がったイボが敏感な尿道の管を押し広げ、最奥に入り込んでいたイボもねじる。

「…………、ア……………はっ……………ア……………そこ、だめ……………奥は、ダメえエエ♡♡　　くっ♡」

また視界が白く塗りつぶされ、脳と下半身が融けていくような快楽を味わう。

太ももがびくびくと痙攣けいれんし、足がつりそうになる。

そこへまたシャッター音が追加され、羞恥心で押しつぶされそうになる。

今まで仕事一筋でやってきたせいで、セックスの経験は驚くほど少ない。恋人を持った経験もなかった。

そこへこんな経験をさせられたら、自分を保てなくなる。

なによりこの後、一体何が待ち受けているのか。

考えるだけで恐ろしい。

「ふふ。尿道プラグでお仕置されるの、そんなに嬉しいんだ。凜さんのお股、震えてて可愛い」

ちゅ、と頬にうなじに優しいキスを贈られた。

「でも本番はここからだよ」

青年の言葉と同時に尿道プラグがズルズルと引き抜かれていく。

ちゅぷ♡　ちゅぷぷ♡　ちゅ、ほん♡

愛らしい音を立ててイボが姿を現すたび、尻がむず痒くなる。

もっといじめて欲しい。

他の、硬くて熱くて遅しい何かで、この体内にぽっかりとあいた穴を埋めてほしい。

そう思ってしまった、つい背後で素股をやっている青年の股間に自分の尻をこすりつけてしまった。

ザラザラとした感触に彼の陰毛を感じる。柔らかな尻肉をチクチクと刺激されて、余計にもっと欲しくなる。

それなのに――。

「まだ、だーめ。皆にイクとこ見せてからだよ」

ずろろろろ♡♡♡

ゆっくりと引き抜かれていたプラグがあと数センチのところまで止まる。

そして激しい速度で尿道を出たり、入ったりし始めた。

「やつ——ッ♡ それ、ダメ！ イッちゃ——う♡ 出ちゃうから、見るな！ み  
るなアアアアア♡♡」

ぶ、ぴゅうううう♡♡

空気を孕んだ音が響くと同時に、射精していた。

薄く透明な液体が四方八方に飛び散り、撮影する男たちの手にかかり、床を汚していく。

そこへ更に背後から青年が素股のスピードを速めた。

「やア！ らめエっ、今、イッてるから——！」

止めようとするも両手はネクタイで縛られている。

素股で太もものつけ根を出入りする雄はいつの間にかもっと遅しくなり、長く伸びていった。

熱く濡れた亀頭に背後から小突かれる。その度に射精中のちんぽの中に収まった尿道プラグも揺らされる。

くちゅ♡ ぶちゅ♡ くちゅ♡♡

柔らかい睾丸を亀頭でぐにぐにと押し潰されると、たまらずまたイッた。

「こづくの、だめ。ダメだと言って——っ♡♡」

今まで精液だけと思っていたちんぽに、奥から別の液体がせりあがってくる。

この感覚は知っている……。今までにも覚えのある感覚だ。

——おしっこ。

それ自体は毎日やっていることだが、今の状況で男たちに見せたくはなかった。

(どおして、こんなタイミングで………♡ だめ。だめ。出るな。戻れ！)

そう願えば願うほど尿意は高まり、早く出せと迫ってくる。

「ふふ。おもらししたくなっちゃった？ 大丈夫だよ。尿道プラグでいじられると

皆そうだから、凜さんもおしっこ漏らしても大丈夫だよ」

(こいつ、分かっていて——！)  
睨みつけようとした瞬間、青年の亀頭が辜丸に思いっきり押し付けられ、先走り  
を塗りたくられる。

(……ア、あ、ア……ッ…………だめ、そこオ……♡♡)

プ——シャアアアア♡♡♡

勢いよくおしっこが噴き出した。透明に近い水滴が噴水のように辺りを濡らし、  
飛び散る。

押しとどめていたものが決壊し、これ以上ないほどの痴態を晒していた。  
黒いレンズたちがおもらしをする自分をはっきりと捉えて離さない。

「初めてでおもらしとか、才能あるじゃん。凜ちゃん」

「俺、これだけで今日のご飯三杯いけるわ」

「おうおう、子どもちんちんぴくぴく揺らして、そんなに気持ちよかったのかな？」

「警部補殿は」

「後ろからタマどつかれたら、そりゃ出しちゃうよなー」  
思い思いに呟かれる言葉の数々に心まで折れそうになる。けれど、こんな連中に屈する気はなかった。

涙と汗が混じった顔で男たちをキツく睨みつける。

その瞬間、男たちの空気が変わった。

「これは『分からせ』てやる必要があるな」

一斉に張りつめたズボンから硬く勃起したチンコを取り出す。

短い太さのあるもの、使い込まれた色合いのもの、さらには竿の裏側に凶悪な筋が浮いたものまである。

それら全てが自分の体に向けられていた。

「あ、あ……やあ……」

この怯えを顔には出したくない。けれど、どうしても心が怖いと感じ取ってしまう。

一歩あとずさろうとすれば、あの青年が背後からきつく抱きしめてくる。

「皆を本気にさせちゃうなんて凄いね。凛」

いつの間にか名前を呼び捨てにされていた。

言い咎めようにも、目の前の光景に意識を囚われてしまいできない。

「でも凛の処女は僕がもらうよ。そういう『話』でセッティングしたんだから」

男たちはへらへらと笑いながらも青年の言葉に従った。

それはつまり彼が首謀者だと示していた。

まだ二十歳程度だ。

こんな若い痴漢を捕まえたことは一度もない。

記憶力はいい方だ。

彼を捕まえた覚えは全くといって無かった。

(まさか彼の親類を俺が捕まえた……?)

なら復讐だ。もっと自分への言葉遣いは刺々とげとげしくなるはずだ。

なのに、それもない。

混乱の渦に叩き落とされていると、青年に顎を持ち上げられた。

後ろに振り向かされる。

ぢゅう♡

「!？」

きつく唇を奪われた。

入り込んできたベロに舌を何度も吸われ、前歯もしゃぶられる。

生まれて初めてのキスだった。

それを年下の見知らぬ青年に奪われた事実泣きたくなる。

「ふふ。僕の調べた範囲だと凛は女の子と付き合ったことないんだよね？ 仕事ひ

とすじ、まじめ人間。だからこれはファーストキスだよね」

「ちが——」

「ただ男に痴漢されるのは初めてじゃないよね？ 高校生の頃、お尻揉まれてじつと耐えてたでしょ。あの顔可愛かったなあ。ほほ真っ赤にして、つり革きつく握りしめて」

「何でそれを、知って……」

あれは十二年も前の話だ。

しかも警察に突き出した男はこの青年とは似ても似つかない。

親類縁者でもないはずだ。

それに当時の年齢を考えれば彼は小学生で……。

そこでハッとした。

痴漢を受けている最中、目の前に幼い少年がひとりで座席に座っていた。

ひとり通学で心細そうな顔を浮かべているのを覚えていた。

子どもの前で痴漢に屈して、通学電車は怖いものだと言う印象を少年に植え付け

たくない。

その一心で確かあの時、駅に停車すると同時に痴漢を突きだしたのだ。

駅員に事情を聞かれているあいだ、閉まる扉の向こうで少年が興奮した面持ちで自分を見ていた。

それをなんだかおもは面映ゆい気持ちで見送ったのは覚えている。

凛にとっては懐かしく心温まる話で完結していた。

けれど彼は？

青年があの時と同じ興奮した面持ちで自分を見つめる。

「凛のあんな顔見せられて、僕、目覚めちゃったんだよね。あの日からずっと僕のオカズ、痴漢に触られて我慢してる君なんだ。それを現実にしたくなってるさ。だから君の処女は絶対に僕がもらおう」

するりと青年が腹をなでてくる。

さわさわと優しくなでられるたび、これから何が自分の体内に注がれるのかいやでも分かってしまう。

「たろっぷり僕のでいっぱいにしてあげるからね。凜」  
そしてまた唇を奪われた。